



重訂 增補

内科撰要

卷十五

洋学文庫
文庫8
C 27
15



増補重訂外科撰要卷十五

遠西 玉成 新垣 兼徳 見 著

津山

宇田川 玄 庵 著

加賀

井

方 著

痛利篇第四十

果向名ヲイセシテ
和蘭名ニイシテ
イシテイシテ
イシテイシテ
イシテイシテ

痛利ノ大数ヲ計ス

若人調

上ルノ類數ニシテ
下ルノ類數ニシテ
下ルノ類數ニシテ
下ルノ類數ニシテ
下ルノ類數ニシテ

第二十七

二章ニ論スル
下利ノ如ク
ニシテ
ニシテ
ニシテ

增補重訂内科撰要卷十五

遠西○玉函涅斯垓爾德兒著

津山 宇田川玄隨 譯

加賀藤井方亭 校註
玄真 增譯

痛利篇第四十七

羅甸名アイセンテリア
和蘭名ペインレイキボイタロプ

痛利ノ大較ヲ論ス

若人圓ニ上ルヲ頻數ニシテ累日休ス。種々ノ物ヲ通
利シ。第二百七十二章ニ論スル下利ノ如クニシテ腹

痛利

痛ヲ兼子。且下利スル毎ニ痛ヲ發スル症。此ヲ眞ノ痛
利ト曰フ。○若此症ニ於テ卒ニ嘔吐ヲ誘發スルハ是
ヲ霍亂ト名クベシ

痛利ノ區別ヲ論ス

此病種々ノ物ヲ下利ス。即粘液。黑膽液。或膿。或膜ノ碎
片。或凝結シテ顆粒ヲ成ス者等ナリ。然ハ下利スル所
ノ物一ナラスト雖モ。唯是ニ腹痛ヲ兼レ必此ヲ痛
利ト名クルナリ。○但其下利ニ由テ血ヲ瀉スレハ則
是ヲ痛赤利ト名ク。○一切液汁ヲ下利セスシテ唯多
ク風氣ヲ泄シ。是ニ痛ヲ兼ルハ此ヲ乾痛利ト謂フ

痛利ノ病因ヲ論ス

此病ノ腹痛シテ下利夥ク。且頻數ニシテ累日休サル
等ノ諸因ヲ蹤跡スルニ甚多端ナリ。○其痛ヲ發スル
所以ハ其毒酷厲ニシテ腸中ヲ刺戟スレタリ。故ニ
其痛ノ劇キ者ハ其毒モ亦甚シ。○下利頻數ニシテ休
サル所以ハ其酷厲毒特ニ腸中ニ在ノミナラス。何ト
ナレハ其毒腸中ニ鬱蓄スルノミナレハ其頻數ナル
下利ニ隨テ暫時ニ是ヲ通利シ去テ累日留連スル
無ルヘシ。然ニ爾ク連綿シテ休サル所以ハ唯是身體
ノ諸部ヨリシテ其酷厲ナル液ヲ腸ニ轉輸シテ絶サ

レハナリ 腸ノ裏面ニ遍ク細小ノ腺アリ。動脈ノ諸支
シ。稀液ヲ取テ常ニ腸中ニ滲出シ。飲食消化及滋潤滑
利ノ用ヲ爲ス。是所謂腸液ナリ。然ルニ此病ニ於テハ全
身血中ノ酷厲毒ヲ諸腸ノ腺ニ輸ル。猶腸液ノ如ク
ニシテ夥ク腸中ニ溢泄シ。又腸ニ循行スル所ノ門脈
動脈ノ支別ヨリ滲泄シ。或腐敗ノ膽液モ亦膽液管ヨ
リ腸中ニ通泄ス。故ニ其下利連綿シテ休サルナリ
○此病ノ輕重險易ハ大抵其下利スル物ヲ見テ知ヘ
シ。即血。粘液。膜ノ碎片。惡臭汚穢ノ異色ノ物ヲ下利ス
ルハ必ス惡性タルヲ知ルヘシ。○全身ニ保ル諸症
ノ如キ。假令ハ壯熱。大渴。惡心煩悶。攣急等ヲ發スルハ
乃其毒全身ニ彌蔓シテ是ヲ腸ニ輸ル候ナルガ故ニ
甚惡性トス。○其腐敗汚穢ノ病毒。各一樣ナラサル故

霍亂

ニ予其一二ノ種類ヲ舉テ左ニ講明ス
痛利。熱病ニ因ルノ症治ヲ論ス
天行疫疾ノ一種。其毒ヲ腸中ニ轉送スル熱病アリ。大
抵秋ノ頃ニ流行ス。其症。大ニ下利シテ痛ヲ兼テ。下利
スト雖モ毫モ輕差スルヲナク。總テ第二百七十五章
ノ下利ニ説ク如シ。○若其毒甚シテ遂ニ痛利トナル
片ハ甚危險トス。何トナレハ其酷厲液ヲ諸腸ニ送ル
ト連綿シテ絶サレハ。腸是ガ爲ニ運動ヲ増發シカヲ
極メ其毒ヲ驅泄スルヲ少間モ休サルノミナラス。更
ニ其毒ヲ以テ諸腸ヲ腐爛シ血絡ヲ穿破シテ出血シ

遂ニ焮腫シテ膿壞スレハナリ○故ニ其熱病漸ク解
 散スト雖モ從前大ニ脫泄スルト。諸腸ノ膿壞腐爛ス
 ルトニ疲極シテ竟ニ必ス救ハレサルニ至ルナリ○
 是ヲ以テ疫熱流行。衆人一般患ル時ニシテ痛利ニ罹
 リ數熱ノ發作ヲ兼ルハ是熱毒ノ爲ス所ニシテ即熱
 病ト症ヲ異ニシテ原ヲ同スル者ナリ。故ニ其本原ノ
 熱病ヲ的識トシテ是ヲ治シ且其毒ヲ皮表ヨリハ汗
 及蒸氣ト作シテ發泄シ。腎藏ヨリハ小便ニ從テ是ノ
 驅除スルニ非レハ方法百計スレモ勞シテ効驗ナキ
 一彰然タリ。但其間ニ意ヲ用テ諸腸ヲシテ甚激動セ

シメス且大ニ侵蝕傷爛スルヲ無ラシムヘシ
 諸腸ヲ侵刺スルカ故ニ自ラ是ヲ除ンカ爲ニ攪擾
 動シテ下利ヲ發スルナリ。然レ其攪擾スルヲ劇キ
 ハ其下利モ亦休ムトナクシテ終ニ罷極ス○斯ノ如
 ルヲ恐ル故ニ後ニ定痛利毒ノ方劑ヲ舉ク
 キ熱病ハ間歇熱ニ非スシテ第三章ニ論スル稽留熱
 或番替熱ノ種類ナルガ故ニ其治法第十一章ニ論ス
 ル順正治法ニ從テ是ヲ治スルヲ緊要ナリ
 利ヲ標症トスル故ニ真熱ノ治法ヲ施スナリ。第十一
 章順正治法ヲ釋シテ曰ク此治法ハ諸種ノ熱病ニ施
 ンテ闕ヘカラス。古道無憂ノ經用シテ差誤ナク允當ス
 所ニシテ所謂王道屬スルカ或不及ニ係ルカヲ診
 症ニ就テ或大過ヲ屬スルカ或不及ニ係ルカヲ診
 得テ其大過ナルハ減損シ不及ナルハ増益シ其
 運行ヲシテ過不及ナキハ自然ノ良能其毒ヲ制服
 運行ニ於テ過不及ナキハ自然ノ良能其毒ヲ制服

シテ驅除スルカ故ニ更ニ藥劑ニテ
是ヲ變易スルニ及ハサレハナリ ○其熱毒ノ性殆
ト第二十五章ノ熱壞液ト一般ナルカ故ニ大抵其治
法ニ從テ療スヘシ ○又諸腸ヲシテ其毒ニ因甚攪擾
激動セシメス且腐蝕壞爛セシムルヲ無カ爲ニ是ヲ
防護スルニ左ノ下劑ヲ兼用スヘシ

痛利ヲ治スル下劑ノ方

定痛利毒飲

薄荷水 八勺

大黃 二錢

孕礬酒石 二勺

右件合シ微火ニ上テ藥氣ヲ浸出シ次ノ藥ヲ加

阿芙蓉液 十五滴

右調和シ十二時中ニ三次或四次ニ服シ盡スヘシ

此ニ由テ腸中ニ溢出セル酷厲液ヲ驅泄シ又腸ノ

攪擾ノ運動ヲ靜止スルナリ

痛利ノ症休ト雖モ其熱未解セサレハ復發スルナリ

リ若是ヲ發スル片ハ再前法ノ如ク治ヲ施スヘシ

此症數發シテ休サレハ其毒終ニ腸中ノ細血絡ヲ侵

蝕穿破シテ痛赤利トナルナリ ○西瑪爾拔皮樹皮名

ノ細末一刃ヲ用或二錢ヲ取テ適宜ノ飲液ニ浸出シ

用レハ能此痛利ノ熱病ヲ除治スト云予從來未其効

ヲ得ス○予屢用テ効驗ヲ得タルハ第二百八十一章ノ赤利ヲ治スル吉利詞爹兒ナリ○其下利及疼痛減シテ患者少シモ煩悶ナキニ至ハ大抵第四十九章ニ舉ル發汗劑ヲ用テ熱毒ヲ皮表ニ驅發シテ屢良功ヲ得タリ○若下利及痛再發セハ復前法ノ如ク其毒ヲ大便ヨリ驅泄シ且右ニ説ク吉利詞爹兒ヲ施シテ其腸ヲ強壯シ其症減スルキハ復前説ノ如ク其毒ヲ皮表ニ驅散スヘシ○右ノ治法ヲ施スト雖モ寸効ナク血及膜ヲ下シテ大ニ惡臭アル者ハ是諸腸ノ大ニ潰爛腐壞セル候トス斯ノ如キ症ニ至テハ治驗ヲ得ル者

鮮シ

全章

痛利腐敗膽液ニ因ルノ症治ヲ論ス

第二百七十一章ニ論スル霍亂ハ酷厲ナル腐敗膽液ヨリ發スルカ如ク其毒ニ因テ亦能痛利ヲ發スルナリ○此症ハ初發壯熱燒カ如ク下利劇クシテ痛アリ然レ能ク意ヲ用テ其毒ヲ驅除スレハ善ク治スルナリ故ニ次ニ記ス藥ヲ多ク温服セシムヘシ

方 涼解酸麥湯

酸模根

大麥

蒸餅 再炮者

荅末林度 各一弓

孕礬酒石 一錢

水 三比

右件合シ煮テ漉過シ滓ヲ去リ用フ

其大便ヲ見ルニ腐敗膽液既ニ滌除スト雖モ腸ノ攪

擾激動仍止サルニ因テ下利及疼痛治セサル者ハ速

ニ次ノ劑ヲ用テ其擾動ヲ鎮ムヘシ

方 **定痛薄嚙飲**

薄荷水 三弓

二百枸櫞汁 四錢

白嚙粟舍利別 一弓

列印設酒 二弓

右件合シ頻々ニ一匙宛用フ

痛利。黑膽液ニ因ルノ症治ヲ論ス下利

黑膽液ニ因テ痛利ヲ發スル其ハ皆必ス救ハヒスト

云ルト是醫聖依ト葛刺的斯既ニ發明セル所ニシテ

其理ナキニ非ス。何トナレハ此下利ヲ發スルニ至テ

ハ黑色ノ膽液 黑膽液固ヨリ夥ク門脈中ニ聚リ酷厲

ニシテ稀涼トナリ。腸間膜ノ靜血脉諸細絡ヲ侵蝕穿

破シ腸中ニ溢流シテ終ニ此症ヲ發スレハナリ腸間膜ノ
靜脈ハ即門脈ノ文別ナリ然レ其毒過多ナラサレハ是ヲ下利シ
除テ患者幸ニ其死ヲ免ルヘシ若其下利頑固ニシテ
休サレハ必ス其死ヲ免レス○此症ハ必ス其下利ヲ
遏止スヘカラス即第七十一章ノ黑膽液病ノ治法ヲ
觀テ知ルヘシ又少ク催睡藥ヲ用テ其下利ヲシテ極
テ大甚ナルニ至ルヲ無ラシムヘシ

乾痛利ノ治法ヲ論ス

乾痛利ノ種類ハ諸氣篇第五十九章ノ治法ヲ施ス又
二百七十章ノ乾霍亂ヲ參考シテ其症治ヲ辨スヘシ

重墜努責篇第四十八

羅甸名「テ子ス」
和蘭名「ベルシ」
グ

重墜努責ノ大較ヲ論ス

夫鼻竅ヲ侵刺スレハ嚏ヲ發シ喉中ヲ刺戟スレハ效
ヲ發スルカ如ク凡直腸ヲ侵刺スル者アルキハ必ス大
便通利セントスルノ意頻ニシテ止サルナリ然レ直
腸結腸ニ尿ナキ片ハ徒ニ努責スルノミニテ通利ス
ル物ナシ此症頻ニ發シテ甚キ者是ヲ重墜努責ト謂
フ○直腸中ニハ常ニ許多ノ滑液有テ其裏面浸潤滑
利スルカ故ニ努責ニ依テ自ラ其粘滑液ヲ下利シ或

直腸中ノ細血絡坼裂スル片ハ血縷紅線ヲ下シ。或是ニ潰瘍ヲ生スレハ其膿ヲ通スルナリ。

重墜努責ノ病因ヲ論ス

凡、直腸ヲ侵刺スル起因アリテ通利ニ由テ是ヲ除クヘカラサル者ハ皆重墜努責ヲ發ス。是ヲ以テ其因必ス直腸ノ裏面或、其衣膜直腸ヲ層成スル膜ヲ云或、其近傍ノ諸部ニ在リト知ヘシ。○右ノ如ク其因一ナラス。且、其傍邊ノ諸部ヨリモ亦是ヲ發スルカ故ニ看法及、治法モ亦種々ノ差別アリ

重墜努責。直腸裏面ノ病ニ因ルノ症治ヲ論ス

重墜努責。直腸裏面ノ病ニ因ルノ症治ヲ論ス

或、下利過甚ナルニ因リ或、其通利スル所ノ者腐敗酷厲ナルニ因テ其觸ル處甚、剝脫剔除スルヲ痛利於ルカ如クナル片ハ是ヲ以テ常ニ直腸ノ裏面ニ塗布シ在所ノ滑液ヲ剝脫剔除シ其裏面暴露スルヲ宛モ皮上ノ表被ヲ剝脫セルカ如ク。斯ニ流來ル液汁皆直ニ其處ニ侵刺シテ痛ヲ覺エ宛モ焚熱セル物ノ觸ルカ如クナルニ因テ乃、重墜努責ノ症ヲ發スルナリ。○若、右ノ症タルヲ診シ得ハ其流來ル液汁ヲシテ剝脫セル處ヲ侵刺スルヲ無ラシメンカ爲ニ。先、左ノ煎湯ヲ作テ水銃ヲ以テ直腸ニ灌入スヘシ

方 鎮痛吉利詞參兒

龍牙草

過爾託亞根

各適宜

右水適宜ニ加、煮テ滓ヲ去リ蜂蜜少許ヲ加ヘ。此液
四弓許ヲ取り。水銃ヲ以テ直腸ニ灌入ス。其灌入
スル藥液、直腸ヨリ瀉出シ。是ニ隨テ腸中ノ酷厲液、
淨除シテ後ハ坐藥ヲ作テ直腸ニ挿ヘシ。

坐藥ノ方 鎮痛坐藥方

油 通例阿利穢
油ヲ用フ
黃蠟 各適宜

右二品ニ的列竝底那。少許ヲ加、火上ニテ凝固セシ
メ。太鷲翹ホドニ作テ腸中ニ挿入シ住ムヘシ。若
責スルニ依テ直腸ヨリ是ヲ迸出スルヲアラハ幾
回モ是ヲ納ル。初ノ如クシ。此症治スルマテ施ス
ヘシ。

所謂肛蟲ナル者。直腸ニ生シテ重墜努責ヲ發スル。丁
アリ。肛蟲ハ漢人所謂蟻蟲ナリ。第二百九十五章ニ出
ル。細蟲ノ如シ。故ニ一ニ是ヲ乾酥蟲ト名ク。此蟲生ス
レハ直腸甚ク痒クシテ堪忍ヘカラス。又大便スル毎
ニ重墜努責シテ休ス。或、此症ハ初ニ下劑及吉利詞參
其蟲ヲ通利スルヲアリ。此症ハ初ニ下劑及吉利詞參
兒ヲ施シ。是ヲ驅除シテ後。右ノ坐藥中ニ亞爾鮮ノ末

少許ヲ加テ直腸ニ挿入シ。或的列竝底那ト蜂蜜トヲ
合シ是ニ亞爾鮮ノ末。少許加ヘ煮テ凝結セシメ坐藥
ニ作り施スヘシ

重墜努責

腸ノ膿瘍ニ因ルノ症治ヲ論ス

凡遠縣稽留シテ休サル痛利ニ於テハ其毒直腸ヲ侵
刺スルヲ甚シテ終ニ此ニ膿瘍ヲ生スルヲ屢多シ。是
ニ由テ其下利休ト雖モ重墜努責ノ症依然トシテ治
セサル者ハ勉テ其膿瘍ヲ治スルニ左ノ吉利詞參兒
ヲ施スヘシ

吉利詞參兒ノ方

排膿吉利詞參兒

龍牙草

舍謨亭點謨根

各適宜

右水適宜ニ加テ煎シ別ニ雞子黃一個ヲ取テ的列
竝底那少許ヲ調和シ。是ヲ右ノ煎湯ニ加ヘ直腸ニ
注輸スヘシ○此ニ由テ腸中ヲ淨掃シテ後小ナル
坐藥ヲ作テ直腸ニ挿入シ住メ置ヘシ

坐藥ノ方 的列並坐藥方

的列竝底那

右適宜ニ取り煮テ凝結セシメ。是ニ舍謨亭點謨根
ノ末。少許ヲ調和シ坐藥ト作ス○大便通スル毎ニ

前法ノ如ク吉利詞參兒ヲ施シ。從テ坐藥ヲ納置ヘシ。是其大便及腐敗液ヲシテ其潰瘍ノ處ニ滯著スルヲ無ラシメンカ爲ナリ

痔疾及痔瘻ニ因テ此症ヲ發スル者ハ治法予カ著ス所ノ瘍科精選ニ載ス

重墜努責

直腸傍邊ノ病ニ因ルノ症治ヲ論ス

熱尿或寒尿此二症共ニ第三章第二百二十七章第三或膀胱

ノ結石或攝護醫範提ノ潰瘍ニ因テ重墜努責ヲ發ス

ルヲ多シ。斯ノ如キ症ハ先各其病ヲ治シテ全愈ルコト非レハ其努責モ亦治セサルナリ○婦人ハ此症ヲ患

ルヲ稀ナリ。是其膀胱及尿道ハ直腸ニ接著スシテ在ルカ故ナリ。然レ子宮及腔ハ直腸ト相接スル故子宮ト腔トニ病アル片ハ直腸ニ連及シテ亦能重墜努責ヲ兼發スルナリ○重墜努責ノ症孕婦ニ發スレハ是ヲ以テ間墮胎ノ前兆トスルナリ。是レハ其胎死スル片ハ頻ニ此症ヲ發シ。一ハ只管努責シテ止サル故ニ是ヲ以テ誘シテ遂ニ墮胎セシムルハナリ○斯ノ如キ諸症ハ唯其重墜努責ヲ治セント要スルモ更ニ効驗アルヲナシ。其直腸ニ連及セル諸病ニ痔漏ニ本原ヲ治スレハ標症自ラ愈ルナリ

重墜努責。病毒直腸ニ轉移スルニ因ルノ症治ス

論ス

若體中一三ノ疾アリテ其毒ヲ直腸ノ衣膜ニ轉移スル片ハ亦重墜努責ヲ發スルヲアリ。此症ハ其毒ヲ直腸ニ因テ排泄スルヲ能ハス。其毒直腸中ニ在ル片ハ排泄膜ニ著者、排泄スヘカラサルヲ云。然ニ自然良能是ヲ驅除セントシテ徒ニ努カラ費ス症タルヲ明ナリ。故ニ諸病ノ終末ニ於テ此症ヲ發スルハ大抵死ニ瀕シト知ヘシ。

諸蟲篇第四十九

羅甸名ヘルメス 和蘭名ワルメシ

諸蟲ノ大較ヲ論ス

蟲ハ衆人能ク知ル所ニシテ詳ニ是ヲ記スモ益ナキガ故ニ特其記得スヘキ者ヲ取り、分テ兩件トス。○其一ハ凡身體諸部。殆ト蟲ヲ生セサル所ナシト雖モ爰ニ悉ク是ヲ歷示スルヲ能ハス。唯乳糜ヲ製造スル諸器。即胃ト腸トニ生スル者ヲ舉ク。○其二ハ凡蟲ヲ分テ三種トス。第一ハ圓長蟲ナリ其形圓クシテ長シ。胃及大小腸ノ中ニ生ス。漢人所謂蛔蟲。第二ハ肛蟲ナリ其形甚細小ニシテ直腸ニ生ス。漢人所謂蟻蟲ナリ。第三ハ條蟲ナリ其形扁長ニシテ扁條ノ如シ。大小腸ニ蔓引

增訂內科摘要 卷十五

漢人所謂寸白蟲ナリ

諸蟲

諸蟲ノ因ヲ論ス

方今究理家。諸微細眇忽ニシテ目力ノ視察シ難キ者
 二至テハ必顯微鏡ヲ藉テ照映ス。故ニ小ナル者能大
 二微ナル者能ク顯ニ。歷々トシテ指數スヘク。是ニ因
 テ無血ノ蟲類細少ニシテ血ナ至細至微ニシテ肉眼
 ノ視ルヲ能ハサル者モ形器全備ノ屬モ必ス各自ニ
 構精シテ小卵ヲ生シ。漸ク孳化シテ生成スルニ非ル
 ハナシト云フ得テ觀テヘク。顯微聞幽悉ク昭察セサ
 ルヲ無キ片ハ更ニ古説ヲ駁シテ斯ニ辨晰スルヲ

須サルナリ近來顯微鏡ノ製作有テヨリ以來構精造
 物卵生ニ非ルハナキヲ明知スル故ニ古説ノ胎生
 濕生化生ノ謬妄更ニ復辨スルニ足サルヲ云究理ノ
 規矩辨物ノ繩墨皆實際ニ
 出ルヲ以テ知ヘキノミ ○予諸蟲ノ生スル所以ヲ
 研究スルニ凡胃腸ニ於テ蟲ヲ生シ且資養テ生活セ
 シムル一箇ノ液ト是ニ相應ナル溫暖氣トナリ此ニ
 ノ者相須テ其液終ニ變化シ蟲ヲ生ス。此變化ハ即蟲
 類ヲ孳化孳生スル所ノ妙用タリト雖モ吾輩唯是ヲ
 腐壞ト名クルヨリ他ナシトス ○體中ノ諸液ハ皆其
 蟲ヲ生スル一液ヲ資養スルニ宜ヲ得。又體中ノ溫暖
 氣ハ蟲ヲ孳化スル煦溫ノ氣ト同一般ナリ。是故ニ總

テ體中ニ鬱滯セル諸液及_レ飲食ヨリ成ル所ノ鬱住セ
ル液ハ殊_ニ能_ク蟲ヲ生スルナリ○若_シ生氣運行ノ力健旺
シテ諸液ヲシテ滯止鬱住セシムル_レ無_クハ更ニ復
盡敗乎化ノ變ヲ生スル_レ無_ク○是ヲ以テ諸蟲ノ生
スル處ハ必_ズ鬱住滯止ノ液及_レ生氣ノ運行微弱ニシテ
製造化熟ノ足サル液アル_レ自ラ彰明ナリ此乃_チ施療
ニ臨テ許多ノ發明ヲ得ル所ナリ

諸蟲ノ症候ヲ論ス

凡_レ症候ヲ以テ蟲ノ内部ニ潛伏スルヲ察スト雖モ甚
確知シ易カラス故ニ唯是ヲ通利シテ目撃スルニ非

諸蟲ノ治法ヲ論ス

レハ總テ皆臆察ニ出ルノミ○胃腸ノ虛弱ナル人殊
ニ小兒ニ於テ腹脹シ大便ノ色常ヲ失ヒ腹痛忽起リ
忽止_リアルハ大抵蟲アル候トシ又蟲ヲ通利スル_レハ
逾_レ是ヲ確知スルナリ

治法通例皆殺蟲ノ諸藥ヲ用故ニ多_クハ水銀劑ヲ與ヘ
或_ハ是ヲ驅除センカ爲_ニ吐劑及_レ下劑ヲ用フ但_シ是ヲ以
テ一掃シ洒然トシテ遺子ナキカ如シト雖モ不日ニ
シテ復_タ故ノ如ク其處ニ滋生スルナリ是故ニ唯_ニ其生
氣運行ノカヲ強健ニシテ蟲蟲ヲ生スルノ機無_クラシ

メ且是ニ因テ身體ニ損害ヲ爲ス所ノ病毒惡液ヲ悉ク泄除セシムルヲ以テ最良法トス○是ヲ以テ小兒ニ於テハ予次ニ出ス方ヲ用テ屢治驗ヲ得タリ

健胃掃蟲散

盧會

沒藥

亞爾鮮鹽

各一錢

攝絲施那

二錢

薄荷油

四滴

右件合シ散劑ト爲シ。四歲ノ小兒ハ兒禿和蘭

我邦小錢程アリ第一抄テ落サルヲ取リ與ルコト百四十四章ニ註スニ抄テ落サルヲ取リ與ルコト日ニ四次○夫ヨリ歲長セル者ハ是ニ準シテ其量ヲ増シ少ナルハ是ヲ減スヘシ○患者是ヲ服シテ大便必日ニ兩次通スルヲ度トシ其服量ヲ加減スヘシ○肛蟲ノ治法ハ上ノ第二百九十一章ニ載ス

鼓脹篇第五十

羅甸名「テイムバニテス」和蘭名「トロムメル」

鼓脹ノ大較ヲ論ス

鼓脹ノ症タル腹部遍ク平等ニ膨脹シ。荏苒トシテ久ク消散セス。是ヲ切按スルニ一箇ノ胞ニ氣ノ充ルニ

醫言

象タリ。又其身體ヲ傾倚轉側スト雖モ腹部少キ低垂
セス平脹膨滿スルナリ

鼓脹ノ病因ヲ論ス

此病ハ腹腔中ニ氣ノ聚リ充テ膨脹スルヲ其症候ヲ
以テ是ヲ知ルニ足ル。何トナレハ若其氣腸中ニ充滿
スルキハ其腹脹右ニ説ク如ク平等ナルヲ能ハス。又
腸ヨリ風氣ヲ發泄シテ腹脹自ラ減スヘシ。然ルニ鼓
脹ニ於テハ少モ斯ノ如キ症ナケレハナリ。○或説ニ
諸腸ノ坼裂傷開セル處アリテ是ヨリ其氣腸外ニ漏
泄シ腹腔中ニ聚積ナリト云リ。然レモ腸坼裂スルヲ無

シテ其氣腹腔中ニ生スルヲアルヲ思ハサレハナリ。
若果シテ腸ノ傷開セル處ヨリ漏泄スル者ナルハ
管ニ其氣ノミナラス腸中傳送ノ諸物モ皆腹腔中ニ
漏泄スヘキナリ。予腸ノ創ニ於テ是ヲ驗スルニ右ノ
如キ風氣ノ充塞スルヲアルヲ見ス。○是故ニ其氣ノ
鬱積スル所以ノ者ハ唯是腹腔中ニ滲出シテ滯止セ
ル津液漸ク腐壞シ。是ヨリ其氣ヲ將出シ來ルナリ。○
此病ハ幸ニシテ其腐壞液ヲ除去ルニ非ハ必ス治セ
スト知ヘシ。○或諸腸ノ常度ニ反セル運動ニ因テ亦
許多ノ風氣ヲ腸中ニ生シ腹脹スル症アリ。斯ノ如キ

學三章

ハ大抵自ラ能復治スルナリ

鼓脹ノ治法ヲ論ス

諸氣篇第五十七章以下ニ於テ第二十一章ノ壞液。第百三十八章ノ搐掣ヨリ生スル風氣ノ症ヲ舉テ治法ヲ説明セリ。鼓脹モ亦風氣腫ノ一種ナレハ再爰ニ其治法ヲ重出セス。○予唯爰ニ説示ス所ハ痙攣ノ運動ニ因テ幾多ノ風氣ヲ生シ腸中ニ鬱積スル症ナル片ハ第五十八章ノ破氣驅風ノ劑ヲ以テ治スヘク。或腹腔中ノ壞液ニ因テ是ヲ發スル者ハ右ノ破氣驅風ノ劑固ヨリ効ナキカ故ニ第二十一章ノ壞液ノ治法ニ

從テ是ヲ治スヘキヲ附言スルノミ

病屬尿道

腎痛篇第五十一

羅甸名「子ピリチス」和蘭名「ガラヘル」

腎痛ノ大較ヲ論ス

腎痛ト稱スル病。一定シテ言難シ。其故ハ諸腰痛ヲ以テ是ヲ槩セントスレハ腰痛悉ク腎痛ト名ツヘカラス。即孕婦ノ腰痛。或腸間膜ノ病ニ因テ發スル腰痛ハ是ヲ腎痛ニ屬セサレハナリ。○唯酷厲ナル粘液或ハ傷冷毒第四十二章ニ出ノ腎中若ハ其傍邊ニ著テ痛ヲ發シ

學三章

或、小石。腎中ニ結成シテ痛ヲ發スル症。是ヲ腎痛ト名ク。○或、熱病ノ毒ニ因テ痛ヲ腎中ニ發シ。或、腎ノ焮衝
 第三百二十ニ因テ痛ヲ發スルモ亦是ヲ腎痛ニ屬ス
 第二章ニ出
 ○是故ニ腎痛ノ名アル病ニ就テ各自ノ所因ヲ舉ケ。
 治法ヲ附スルヲ宜シトス。

腎痛

腎痛。結石ニ因ルヲ論ス

左右兩腎ヨリ各一管起テ膀胱ニ連リ。常ニ小水ヲ腎
 ヨリ受テ膀胱ニ輸ルヲ主ル。是ヲ輸尿管ト謂フ。其
 管ノ起ル處ハ腎中ニ在テ潤ク且ツ觸知甚ク銳敏ナ
 リ。醫範提綱ニ云腎ノ外側ハ圓ク内側ハ凹ナリ。凹ナ
 レ處ノ裏ニ空間アリ。空外潤サ。一指橫徑許。此ヲ

腎痛

腎痛。結石ヲ生スル原由ヲ論ス

腎盂ト名ク此即テ輸尿管起テ潤キ處ナリ。又云。輸尿管
 ハ太羽管ノ如キ膜管ニシテ左右各腎盂ニ起リ。腎ノ内
 側ヨリ出テ俱ニ腰脊ノ兩側ニ循ヒ下行ノ膀胱後。是
 面ノ下部ノ兩側ニ連リ。尿ヲ腎ニ受テ膀胱ニ輸ル。是
 ヲ以テ若小石斯ニ生スルキハ即腎ニ於テ大ニ痛ヲ
 發ス。○是ニ因テ自ラ兩件ノ疑難ヲ生スルヲアリ。即
 試ニ問フ其小石ノ腎中ニ生スル所以ノ者ハ何ソ。是
 一難ナリ。又問フ何ヲ以テカ其痛。腎中ノ結石ニ出ル
 一ヲ知ルヤ。是ニ難ナリ。○第一難ハ假令其理ヲ啓發ス
 ト雖モ特ニ新說異聞ヲ資ルノミニテ醫術ニ關ルノ
 裨益少シ。故ニ予是ヲ廣喻詳說セス

日常小水ヲ瀉シ貯ル器中ニハ日ヲ經ニ從ヒ其周圍
自ラ鹵石様ノ鹼渣ヲ結フナリ是ヲ小水ノ自性トス。
然レ是每人差多少アリ○元來小水ノ通スル諸道ニ
ハ天造自然ニ滑液アリテ周ク其裏面ニ塗布シ是ヲ
以テ常ニ夫ノ鹵石様ノ鹼渣ノ結成スルヲ禦クナリ。
故ニ天工若此液ヲ賦與スルニ非レハ每人必ス結石
ノ患ニ罹ルヘシ。喻ハ人ニ大抵齒牙ニハ石灰ノ如ク
鹵石ノ如キ物。附著スト雖モ卽餘口中ニハ何ノ處モ
滑液塗布シテ浸潤スル故ニ少シモ夫ノ鹼渣ノ結成ス
ルヲ無キカ如シ○然レ小水中。鹵石ヲ結フヲ多キ人

ニ於テハ輸尿管ノ起ル處腎盂或膀胱中。天造ノ滑液ヲ
以テ其鹼渣ノ附著スルヲ防禦スルニ足ラス。故ニ其
小水暫ク滲漬シテ瀦留スル處。鹵石様ノ物漸クニ凝
著シテ終ニ小石ヲ結成シ。是ヲ核トシテ又新ニ來テ
其周圍ニ膠著シ漸次ニ包裹層成シテ益大ナル石ヲ
結フナリ○是故ニ常ニ動作勞カスル人ヨリハ靜坐
ノ輩多ク此患ニ罹リ。尚且脚痛。痛風共ニ痛風失苟兒
陪第二十九苦章ニ出ノ病アル人ハ結石ニ罹ルヲ殊ニ甚シ。
斯ノ如キ人ノ小水ハ是ヲ右ノ病ナキ人ニ比スレハ
鹵石様ノ鹼渣。洩器ニ附著スルヲ甚多シ

腎痛。結石ニ因ルノ症候ヲ論ス

腰痛及其痛ヨリシテ誘發スル諸症ノミヲ以テ腎中
 結石アルヲ察スルノ甚難シトス。其故ハ他ノ因ヨリ
 發スル腎痛モ亦同ク右ノ諸症ヲ發見シテ疑似決セ
 ス的識シ難キヲアレハナリ。○其尤確實ニシテ據ルヘ
 キ症候ハ其人腰痛ヲ患ヒ小便ノ質ヲ驗スルニ必_ル兩
 石様ノ鹼渣速ニ洩器ニ附着シ且其人常ニ勞力動作
 ヲ爲ス_ル少ク又其痛腎ヨリ斜ニ下行シテ膀胱ニ牽
 連スルヲ覺エ或腰痛休ムキハ膀胱ノ部ニ當テ痛ヲ
 覺エ且小便閉若ハ艱澁ノ症ヲ兼發スルナリ。○患者

從前右ノ如キ諸徵候アリ且屢其痛ヲ發シ自後小石
 或細砂ヲ通泄スレハ其痛消散スル者ハ殊ニ結石タ
 ルヲ確知スルナリ。○其痛荏苒トシテ久ヲ經ル者ハ
 結石ノ大ナルヲ察スヘシ。小石久ク滯著スルキハ
 漸長大ニ至レハナリ

腎痛。結石ニ因ルノ治法ヲ論ス

結石腎痛ノ治法其標的トスル所一ナラス。○第一ハ
 其凝積シテ層成セル小石ヲ烱解シテ是ヲ小便ニ通
 利スル藥劑ヲ用ルナリ即甘消石精名及和蘭紀元一
 千七百三十九年本朝元ノ頃ニ當テ貴婦秘底邊斯諸

厄利亞リ國ア名ニ於テ世ニ弘ル所ノ一方此病ニ効アルヲ稱セリ。予是ヲ知サルニ非ス。然レ此甘消石精ハ其効殆ト醋ト異ナラス。私底邊私ノ方ニ於テハ予未タ其効ヲ明證シテ普ク人ニ施スヘキノ良驗ヲ得ス。○第二ハ其己ニ結成セル小石ヲシテ瀉出シ易カラシムルノ法ナリ。予次ニ出ス簡易ノ一方ヲ用テ良驗ヲ得タリ

結石腎痛ヲ治スル飲劑ノ方

腎痛瀉石飲

- 枸櫞汁 一弓
- 甘麗桃油 一弓半

肉豆蔻 末ニ錢

白葡萄酒 六弓

右件先ニ味ヲ取テ調勻シ次ニ白葡萄酒ヲ下シテ合和シ三四次ニ分チ服ス
右ノ藥ヲ服スルノ間ハ必ス多ク温湯及乳汁ヲ飲シムヘシ。是ニ因テ結石ヲ推盪シテ導泄シ易カラシムカ爲ナリ。○若シ結石大シテ輸尿管或尿道ヨリ送輸スルヲ能ハサル者ハ手術ヲ以テ是ヲ除クヨリ他ノ方ナシ。是予カ著ス所ノ瘍科精選ニ載ス。○第三ハ結石ノ增長スルヲ豫メ防クノ療術ナリ宜。是カ爲ニ諸法方ヲ

施ヘシ。凡、身體ヲ運動スルト緩和ニシテ淡稀ナル飲液ヲ多服スルトハ能ク結石ノ增長スルヲ防ク故ニ大ナル石ノ隱伏セルノ恐レナキ患者ハ勉テ逍遙閑歩セシメ。或、車馬ニ乘ル等ニテ身體ヲ運動セシメ且、飲液及、乳汁ヲ多ク飲シメ。一切消化シ難キ食物并ニ多ク鹽ヲ調和シタル物。炮炙ノ物ヲ禁シ。毎朝可喜湯或、茶湯ヲ以テ次ニ記ス丸子ヲ四丸宛用ヘシ

結石ヲ治スル丸子ノ方

解凝銷石丸

石鹼 勿搦祭亞者 三錢

沒藥

琥珀 各半錢

拔爾撒謨格拜霍 一錢

甘草 末適宜

右件合シテ每一錢十五丸トス

若其結石ニ因テ痛ヲ發スルヲ甚キ者ハ次ノ飲劑ヲ以テ溫服セシムヘシ

和解定痛飲

精大麥

遏爾託亞根

甘草 各一弓

白罌粟球

二顆

水

三匙

右伴合シ煮テ滓ヲ去リ。用ルニ臨テ乳汁ヲ等分ニ和調シ服ス

右ノ劑結石痛ヲ緩解スルノミナラス又能ク小水ヲ利シ且尿血ヲ防護ス

腎痛。酷厲ナル粘液ニ因ルノ症治ヲ論ス

譬ハ酷厲ナル粘液。肺管ニ鬱滯スル片ハ效嗽甚シテ痰ヲ咯カ如ク。若小水ノ諸道ニ塗布セル滑液酷厲ト爲ル片ハ亦腎痛ヲ發シテ小水ニ渣脚多シ。然此モ

第三章

小石細砂ノ候ナシ。此痛ヲ厲液腎痛ト名ク。○其發スル所ノ諸症。結石腎痛ノ如シト雖モ小水ノ鹼渣。澀器ニ著イナク。又小石細砂ヲ通泄セスシテ唯多ク粘液ヲ通シ且他ノ腎痛ニ比スレハ戰慄スルイ多シ。○此症ハ粘液ヲ稀釋スル驅水劑ヲ與ヘシ。○
解凝驅水散

琥珀

乳香

鹿角灰

亞爾鮮鹽

各一錢

二錢

二刀

茴香油 六滴

右件散劑トシ、分テ二十服トシ、日、用ル、一、三、四、服、○
其痛劇キ者ハ精製阿芙蓉^名三氏ヲ加ヘシ

註元來小水ノ質ハ慄悍酷厲ナル故ニ其通利スル
道路ヲ侵刺セサラシメンカ爲ニ是ニ周ク天造ノ
滑液ヲ塗布シテ其侵刺ノ害ヲ受サラシム。然ニ若
其滑液剝脫シテ漏泄スレハ亦此厲液腎痛ヲ患ル
ナリ是、小水ノ諸道、即腎、輸尿管、膀胱ニ塗布セル滑
液剝脫スル故ニ小水ノ悍厲氣直ニ抵觸侵刺シテ
疼痛ヲ發シ。或、其漏泄スル所ノ滑液、膀胱ノ頸、ハ

尿道ニ滯著シテ窒塞スル片ハ小水艱澁不利。或、尿
閉ヲ患ルナリ○此症連綿シ治セサレハ動モスレ
ハ小水ニ血ヲ交テ通スルコトアリ○其滑液ヲ通瀉
スルコト多クハト逾、其痛并ニ諸症モ險重ナリ○治法
ハ衰弱ヲ強壯シ且、收瀆閉止スル劑ヲ用テ其漏脫
スル滑液ヲシテ其道路ニ保住布護セシムル片ハ
自ラ治スルナリ○其方、阿煎藥ヲ取テ水ニ浸出シ
多服セシメテ良驗アリ。或、左ノ方ヲ與ヘシ

方

幾那阿煎飲

幾那丁幾丟爾^名

阿煎藥 各一弓

舍電法セイデン護阿芙蓉液カハム 一錢半

右件調勻シ。一時毎ニ三十五滴或四十滴ヲ用ヒ其
症愈ルニ隨テ漸ク方中ノ阿芙蓉液ヲ減シ或是ヲ
去テ用ヘシ

第三章

腎痛。傷冷毒ニ因ルノ治法ヲ論ス

腎ハ神經布蔓スル₁多キヲ以テ第四十二章ニ論ス
ル酷厲ナル傷冷毒。其神經液ニ滯著スル₁ハ酷厲液
ノ侵刺スルニ因テ亦腎痛ヲ發スル₁多シ。其痛一處
ニ滯著セス。多クハ彼此ニ游移スルナリ。此症ハ宜ク

傷冷毒篇ニ從テ是ヲ察シ。且ツ治法ヲ施スヘシ○若脚
痛及ヒ痛風ノ毒。腎ニ侵襲シテ腰痛ヲ發スル者ハ亦
各其病原ニ從ヒ藥劑ヲ施テ是ヲ療スヘシ

增訂
內科
要
卷十五

二十六

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

書賈



江戸淺草茅町三丁目

須原屋伊八

浪華心齋橋通北久太郎町

河内屋儀助

同心齋橋通唐物町

河内屋太助

京三條寺町西入町

丸屋善兵衛



